

国際シンポジウム「16世紀前後の日本と東アジアをめぐる〈異文化交流文学史〉」要旨集

I 基調講演 11月5日(土) 10:10~12:00

小峯和明「16世紀前後の日本と東アジアの〈異文化交流文学史〉」

人類史に残るようなコロナ禍に始まった科研活動の集約として本シンポジウムは企画されたが、現実に異文化交流のできない環境の中であらためて異文化交流とは何か、〈異文化交流文学史〉はいかに構築し、展開しうるのかを問い直す機会を与えられたように思われる。「16世紀前後」は、キリシタンを媒介にアジアと西洋が初めて出会う大航海時代に当たり、末期には内戦を平定した豊臣秀吉が大陸進出を企て朝鮮侵略を断行、明が朝鮮を支援し参戦する東アジア規模の戦争も勃発、ひいては明清交替にまで波及する。人と物の移動が地球規模にひろがり、都市文化や出版文化が隆盛を迎える、近代につらなる始発の一大変革期にほかならない。そのような時代の前後を基軸に、今日、国際化時代に応じて関心の高まっている多文化間の交流、融和、接触、軋轢、拮抗等々を通して生まれ、受け継がれ、再生していく文学のありようを総合的に検証する試みである。

ここでは、本シンポジウムの全体の枠組みについてふれ、さらに私的な関心として主眼を置いている架空、幻想の異文化交流について「往く人、来る人」の観点から述べてみたい。

阿部龍一「法華経を文学作品として読み直す—法華経と仏塔信仰の問題を中心に」

法華経が東アジアの諸文化で文学や芸術の諸分野の発展に大きく寄与してきたことは言うに及ばない。それは何にも増して法華経のテキスト自体の文学作品としての優秀性による。ところが伝統的な仏教学の法華経の注釈書では、仏教専門用語の註解や仏身論など東アジア仏教の中心的教理の視点からの経の解釈に重点が置かれている。法華経テキスト固有の修辞法、幻想的表現、物語の綾の生成や流れを理解しようとした法華経の注釈書や教理書は存在しない。

その一方で近年の仏教研究では、インド初期大乘仏教の発展状況の解明や、鳩摩羅什訳「妙法蓮華経」(406年)、竺法護訳「正法華経」(386年)、闍那崛多・達摩笈多訳「添品法華経」(601年)の翻訳テキストとしての比較が可能となった。このような研究の発展を踏まえて、本発表では多宝塔の出現と二仏並座で有名な法華経の第11章がなぜ文学作品としての法華経のクライマックスを成すのかを論じ、そこで経テキストと仏塔の関係がどう描かれているかを検討する。

岡美穂子「相良清兵衛の地下室とは何であったのか—妙見信仰施設としての仮説提起」

2022年9月19日付の朝日新聞デジタル版に「日本の城跡から見つかった謎の地下室 ユダヤ教の沐浴施設の可能性」というタイトルが出て、ヤフーニュースのヘッドラインにも転載されたことで、大きな話題となった。これはそのような可能性を見出すことができるのか否かを問うシンポジウムの宣伝であったのだが、実際にはあたかも朝日新聞が熊本県の人

吉城の地下遺構が「ユダヤ教施設」であると報じたように捉えられて、SNSなどで拡散されてしまった。

私はそのシンポジウムに、16 から 17 世紀にかけて長崎にもイベリア半島から流れてきたユダヤ教徒がいたことを話す役割で招待されていたのだが、自分なりに分析を進めてみた結果、その施設は「妙見（北辰）信仰」あるいは「鎮宅霊符（真武神）」信仰に関係するものであったのではないかという結論に至った。もちろん具体的な実証要素が極めて不十分な仮説ではあるが、これまでその地下遺構は「かくれキリシタンの洗礼室」「ユダヤ教のミクヴェ（確かに形状は酷似している）」などの説が取り沙汰され、「妙見信仰」との関連性を唱えた人はいないようなので、地下という建築技術の問題はさておき、これが信仰施設としては「西の宗教」と関係なくとも成立しうるものであることを論じ、専門家の方々の意見を仰ぎたい。

松居竜五「南方熊楠「ロンドン抜書」に見る異文化接触—16世紀の日本とヨーロッパのファースト・コンタクト」

南方熊楠（みなかたくまぐす・1867-1941）は和漢洋の膨大な文献を読破した人物であるが、近年の研究からは、文化圏を横断する視線の交錯の問題に強く注目していたことがわかってきている。熊楠が20代後半から30代前半にかけて大英博物館などで作成した52冊の筆写ノート「ロンドン抜書」（1895-1900）の中には、世界のほとんどあらゆる地域の旅行記と民族誌が含まれており、そこには異文化接触に対する強い関心を見ることができる。特に、16世紀の日本とヨーロッパのファースト・コンタクトが引き起こした思想的対立と交流に関わる文献の収集は、熊楠の学問がかつて言われていたような脈絡のない雑学ではなく、比較文化の視点から確固とした認識を築こうとしたものであったことを裏付けている。本発表では、こうした熊楠の知的探究の軌跡を追うこととしたい。

II シンポジウムA「宗教」 11月5日（土）13：10～14：05 14：15～15：00

本セッションでは、仏教、道教、儒教、神道、キリシタン等々、東アジアにおける宗教をめぐって、思想、信仰、求法と伝法、巡礼、民俗などの面から多角的に〈異文化交流文学史〉の諸問題を検証する。（小峯和明）

伊藤聡「東アジア宗教のなかの吉田神道」

「神道」は、太古から続く日本の固有の宗教と一般的には思われているが、実際には歴史を通じて、常に東アジアの諸宗教・諸思想の影響・刺激を受けつつ変転を繰り返したものであって、固有でも不変でもない。古代のカミ観念は大陸・半島の神霊信仰や神祇制度の大きな影響を受けて形成されたのだし、本地垂迹説も大陸から来た垂迹神の考え方なしには成立し得なかった。さらに、両部神道や伊勢神道などの中世神道説も、新来の禅仏教のインパクトによって教理化が進展したのだった。

吉田兼俱（1435－1511）が創唱した吉田神道（唯一神道）は、中世神道の最終段階に登場した流派である。兼俱は自家の神道を、天児屋根命以来連綿と受け継がれてきた古き教えだと主張したが、実はその教説や儀礼には、道教経典や儒仏道三教一致思想が重要な要素となっている。彼が新しく日本にもたらされた経典や思想をいち早く摂取し得た背景には、五山禅林の僧たちの存在があった。本報告では、吉田神道を軸に中世後期日本における東アジア宗教・思想交流を考える。

大西和彦「後黎朝期ベトナムの中元節行事について」

李朝期（1009～1225）から史料上に現れるベトナムの中元節は、朝廷の祝賀祭として長く7月5日に挙行されていた。同時期の中国史料には、李朝期ベトナムにおける祖先の不祭祀が記録されている。後黎朝期（1428～1789）に増加する関連史料によれば、中元節は人々が滑稽劇などの娯楽に興じる日となっていた。18世紀には、中元節は青年たちが常日ごろ演目の扮装をしてまで準備した軽演劇を発表する日となり識者を嘆かせている。

一方、18世紀の葬送儀礼書には、中元節に行われる死者への追善供養の儀式が記され、中元節は娯楽を追求するだけの祭日ではなかった。さらに、同時期の儀礼文書集には、親族を含む死者への畏怖に対応する儀式が見える。このような儀礼文書に現れる死者への畏怖の表象から、後黎朝期中元節における娯楽には、ベトナム人の恒常的な死霊に対する恒常的な畏怖が内在すると推測される。

高陽「大唐西域記をめぐる異文化交流」

7世紀に唐から天竺に赴き、膨大な仏教経典を持ち帰って中国で漢訳した玄奘三蔵の旅の見聞録が、有名な『大唐西域記』全12巻である。西域や天竺諸国の当時の様子を記録した地誌の性格をも持ち、後続の天竺求法の指南書になるばかりでなく、諸地域の伝説や伝承をはじめ、仏伝やジャータカ（本生譚）などの説話、故事なども豊富に語られ、文学としても注目される作品である。とりわけ『大唐西域記』は日本でも様々に読まれ、語られ、再創造された。ここでは〈異文化交流文学史〉の面から『大唐西域記』をめぐる説話・唱導・絵巻等々にわたる諸問題を検討したいと思う。

評者：水口幹記、趙恩鶴、ハイエク・マティアス

Ⅲ シンポジウムB「対外戦争」 11月5日（土）15：15～16：10 16：20～17：05

〈戦争〉は生活空間を一変させる悲惨なものであるが、そこに人々の流動、文化の展開があることもまた事実である。そして、〈戦争〉を描く歴史叙述は、テキストの形成やその表現史をめぐる、学際的に検討してゆかねばならないテーマである。本セッションでは、対外戦争・異国合戦・侵略という観点から〈異文化交流文学史〉を問い直してみたい。（目黒将史）

徳竹由明「対馬に於ける蒙古襲来の〈記憶〉—神風・蒙古塚」

長崎の離島対馬には、近世期の『対州編年略』や『津島紀事』等に、多様な蒙古襲来言説が伝わっている。文永の役に関する言説は、基本的に『八幡愚童訓』甲本の叙述を基として、対馬藩主宗氏や藩士の祖先の活躍を誇大的に描くものである（拙論「対馬に於ける文永の役関連言説の生成と変容」『軍記と語り物』54、2018年3月）。一方、弘安の役については、典拠とする文献が見つからなかったためか、佐賀村での「神風」による蒙古軍の退散を創出する（拙論「対馬に於ける弘安の役関連言説の創出」説話・伝承学会2017年度大会口頭発表）。そしてこの言説は、対馬に於いては近代以降も、歴史的事実に近い扱いを受けていく。さらにこの「神風」による異国退散は、架空の戦役にも活用されていく。その様相と背景を考察する。また『津島紀事』によれば、対馬島内にはかなりの数の「蒙古塚」が存した。基本的には古墳時代の古墳で、その出土物を異国の軍勢の遺物に見立てたものだが、来襲する異国の代表として「蒙古」の名称が冠されているもので、他の異国襲来の伝承を纏ったものも存する。それらの来歴や伝承についても考察する。

松本真輔「明治期に製作された豆本『朝鮮征伐記』とその周辺」

豆本とは、幕末から明治初期に作られた掌サイズの極小本を指す。絵が主体の読み物で、主に子供を対象にしている。和装本の体裁をとり、紙料も粗悪であるが、表紙はカラーで印刷されており、本文は白黒のものと、色つきのものがある。加藤康子『幕末・明治豆本集成』（国書刊行会、2004年2月）の刊行など、近年、研究が進んでいる分野でもある。そして、この豆本作品の中に『朝鮮征伐記』と題された作品群が存在する。タイトルはそれぞれ微妙に異なっているので、ここでは一括して『朝鮮征伐記』としておくが、内容は、いわゆる文禄慶長の役を題材にしたものである。近世のいわゆる朝鮮軍記物については崔官『文禄・慶長の役——文学に刻まれた戦争』（講談社、1994年）金時徳『異国征伐戦記の世界』（笠間書院、2010年）が出たことで大きな見通しがついており、本発表では、これらに助けられつつ、近代における異国合戦譚受容の一端を明らかにしてみたい。

ファム・レ・ファイ「『南国山河』と『天書降下』—ベトナムの独立宣言にみえる異文化コミュニケーション」

10世紀から11世紀にかけて、ベトナム（大越国）は二回にわたって北宋の侵攻を受けていた。『粵甸幽霊』や『嶺南摭怪』などの古説話集によると、その際に神廟から「南国」の独立を主張し、勝敗の結末を予知した漢詩を吟ずる声が聞こえ、それをうけた宋軍が大敗を喫したという。「南国山河」という文言からはじまったこの漢詩は後世に「南国山河詩」、または「神詩」とよく仮称されるようになった。15世紀に入ると、明から独立を勝ち取ってから間もない時期に編纂が開始された『大越史記全書』に「南国山河詩」およびそれをめぐる説話が収録され、国史上の漢詩や説話の存在となった。さらに20世紀に入ると、フラン

ス、日本、アメリカ、中国などの列強と苦戦しながら、独立をようやく取り戻したベトナムでは当詩が再び注目され、黎朝期の「平吳大誥」と1945年のホーチミンによる「独立宣言」に先導したベトナムという国民国家の第一弾の「独立宣言」と位置づけられるようになった。

「南国山河詩」の作者やその成立時期などに関してこれまで Ha Van Tan や Nguyen Thi Oanh をはじめ、様々な学者に論じられてきたが、本稿では、当詩に登場した「天書」に初めて着目し、北宋期に流行っていた「天書降下」の祥瑞に関連性を結びつけ、そこに見える異文化コミュニケーションの諸相を考えてみたい。

評者：佐伯真一、渡辺美季、グエン・ティ・オアイン

IV シンポジウムC「渡海、漂流」 11月6日(日) 9:30~10:25 10:35~11:20

本セッションでは、「渡海、漂流」に関わる出来事、体験、記憶、記録、表象等を糸口として、「日本と東アジアの〈異文化交流文学史〉」の一側面に検討をくわえる。文学研究の課題としては未成熟な段階にあるテーマだが、関連諸領域の研究動向に学びつつ、その可能性を展望してみたい。(鈴木彰)

王尊龍「近世琉球における渡海と離別—「楚南家文書」所収送別詩の紹介と考察」

近世の琉球王国では、古琉球時代と全く異なる内政・外交方針が整備されると同時に、学問・思想の領域においても新しい認識枠組の形成が見受けられる。その代表的な事象として、漢詩の制作技巧に精通し、漢学を教養基盤とする士族層の拡大が挙げられる。特に十九世紀以降になると、久米村にとどまらず首里にも漢詩の普及が進み、結果として外交の場だけではなく、琉球人同士の間でも漢詩の贈答が行われるようになった。その中で、日本や中国への「旅役」に任ぜられた家族や友人への送別詩が相当の比重を占めている。しかし、これらの作品に関しては、これまであまり注目されておらず、それを対象とする研究はいまだに少ない現状である。そこで本報告では、「楚南家文書」(法政大学沖縄文化研究所所蔵)に含まれる漢詩関連の史料から、送別を主題としたものに着目し、周辺諸国の同類作品と比較しつつその特徴を検討することを試みたい。

北條勝貴「海へ逃げる／漂着者に対する」

クラストルはかつて、民族社会の国家形成に対する抵抗の方法のひとつとして、移動すなわち逃亡を挙げた。スコットも中国西南少数民族を扱うなかで、巴蜀や江南にあった彼らが広域権力から逃れるように、より西方や南方へ、あるいは東南アジアへと移動していった様子を跡づけている。私も以前、ヤオ族のうち海へ逃れた集団が、始祖伝承＝歴史を再構成する意味について考えたことがある。しかし、もとより山中を移動し焼畑を生業としていた彼らが、そもそもなぜ、未知の海域へ踏み出そうとしたのだろうか。これに限らず、東アジア

の長大な歴史においては、社会の構造変動や大規模な戦争を契機に、相当規模の集団が海へと逃亡することがあった。彼らのうちには、当然海域と無縁の暮らしを営んでいた人びとも、少なくなかったはずである。決意の船出も、時期を選べぬ緊急のものであれば、漂流の危険性が増すだろう。また列島の各地には、漂着者をめぐる歓待／拒絶の伝承が、記録や民俗行事などの形で残されている。逃亡先として海を選択することとその果ての漂流、漂着先の社会が苦難に遭った人びとへどう対応したかという問題は、後世にどう語り継がれ、いかなる影響を及ぼしてゆくのだろうか。やや広いスパンで考えてみたい。

崔英花「18世紀前半の漂流による異文化の接触と海外情報の流入—朝鮮後期の「漂流記事纂輯書」を中心に」

漂流とは、航海の途中に起こる突発的な不可抗力によって、船が意図せぬ国や地域に流れ着く海難事故を指す。海外旅行や私的な往来が禁止されていた朝鮮時代に、漂流は異文化と交流し、外部の世界と疎通できる重要な通路の役割を果たした。

18世紀前後の朝鮮では、漂流による異文化接触を通じた海外の「有意義」な情報を収集、集積しようとする傾向が見られ、このような傾向を鮮明に示す書物が記された。これらが本研究の対象である李益泰の『知瀛録』(1696年)、宋廷奎の『海外聞見録』(1706年)、鄭運經の『耽羅聞見録』(1732年)である。本研究では、漂流に関連する資料を多数集めて本にまとめた点を強調して、これら三冊を「漂流記事纂輯書」と呼ぶ。

本研究では、17世紀中頃以降の一部の朝鮮学者によって漂流を通じた異文化接触と海外の情報が重視された事を受け、執筆の目的と傾向が見える著書に注目する。『知瀛録』、『海外聞見録』、『耽羅聞見録』の分析を通じて、これら漂流記事撰集書で見られる異国文化、執筆の意図、執筆方式、対外認識などを議論する。また、これらの漂流記事撰集書が18世紀後半から出版される大型叢書をはじめとするその他の著述に影響を与える様相に注目しながら、漂流を通じた異文化接触と海外情報の流入が朝鮮後期の知識層に及ぼした影響について議論を試みる。

評者：屋良健一郎、関周一、金英珠

V シンポジウムD「外交、使節」 11月6日(日) 11:35~12:30 12:40~13:25

本セッションでは、「外交、使節」というオフィシャルな活動、人的往来を通してみる「日本と東アジアの〈異文化交流文学史〉」について、琉球、朝鮮、中国(明)の視点を基軸として検討を行う。それぞれの地点を結ぶ線のみならず、各線が交錯するさまをも浮かび上がらせていきたい。(河野貴美子)

木村淳也「琉球使節の外交と文化」

都合 19 回を数えた江戸期の琉球使節の渡来は、一般の人々の琉球に対する興味を誘い、これが市中の出版活動と結びつくかたちで、行列図・行列記などの一枚摺の刊行物が数多く生み出された。また、文人・識者などの間でも琉球に対する関心が高まりをみせ、江戸中期から後期にかけて、琉球の歴史、風俗などを総合的に解説した琉球物版本があまり刊行される。江戸期の総合的な琉球研究の頂点は、新井白石の『南島志』（1720 年）と言ってよく、琉球の高官との直接的な面談が反映されている点が、巷間に流布した琉球物と大きく異なる。他に、琉球人との直接的な対談を記した書としては、薩摩藩儒・石塚崔高が琉球士族・楊文鳳と筆談対話した『琉館筆譚』（1803 年）があり、また、この書と同時期に、大坂と薩摩の書肆が共同するかたちで、楊文鳳の漢詩集『四知堂詩稿』（1806 年）も刊行されている。これら両書が何故この時期に作成されたのか、その成立意図を江戸期の外交の特徴を絡めながら考える。

李暁源「16~18 世紀東アジアにおける古文辞論の流行と韓日文学交流 - 通信使筆談を中心に」

16 世紀中国では李夢陽、何景明、李攀龍、王世貞などにより復古主義文学論が提唱された。秦漢古文と唐詩を典範とする古文辞論は 16 世紀半ばに朝鮮の文壇に伝えられ、16 世紀末にはかなり流行していた。当時の著名な文人たちは古文辞論を通して自身の文芸性を発揮しようとしたのである。古文辞論は創新論と 18 世紀まで競い合う関係にあったが、その後燕巖朴趾源という優れた文学者により両文学論の折衷が行われた。日本においては 18 世紀、荻生徂徠により古文辞論の流行がはじまり、18 世紀末まで文学と思想の両面で日本の文壇を風靡した。18 世紀に 4 回にわたり行われた通信使交流で、朝鮮と日本の文人たちは唐宋古文と古文辞、宋詩と唐詩について論争を行った。また荻生徂徠は古文辞論を根拠に文学で通信使を圧倒したと自信を表すこともあった。朝鮮の古文辞論者たちは王世貞を好んだのに対して、日本の文壇では李攀龍の方をより尊崇していた。このことは文学史における両国の文学的、文化的相違を表すものでもある。

陳小法「日明医学文化交流の研究」

明時代（1368-1644）に、中日両国の人と物の移動が頻繁になったことにより、梅毒、インフルエンザ、疫病などの伝染病もその発生と彼我感染の比率が増加した。また、当時の日本国内に於いては戦火が多発し多くの死傷者が出る一方、禅僧の漢学素養が高かったこともあり、日明の医学文化交流も盛んに行われピークを迎えていた。その中で入明留学、明版医書の将来、中国薬材の輸入、中国医書の翻刻などの手段を通じて日本人は明朝医学を習得し、広めていった。

明廷側も日本の医学技術の需要に積極的に応じた一方、使節団医者、在日唐人医者、遣民医者、捕虜医者というような特殊な人々が日本で医学活動を行い活躍したことによって、日本の医学の発展にも協力した。これらによって近世日本の漢方医学の構築のための基礎が固められた。だが、明朝医学を尊び、それに憧れると同時に、一部の入明留学した医者、家

族及び後継者は本国において立身出世するために、本人或は家元の在明履歴を美化した可能性も否定できない。

評者：金文京、山本嘉孝、高津孝

VI シンポジウムE「交易、物流」 11月6日(日) 14:35~15:30 15:40~16:20

〈経済制裁〉〈経済安全保障〉〈文化経済政策〉等の言葉が示すように、現代は〈経済〉優先の時代である。一方、古典の時代、東アジアの地域はどうだったのか。本セッションでは、この問題に、商業(商人)、交易、物流(物産)の視点から、様々なアプローチと検証を試みる。(染谷智幸)

大木康「中国明清時代の商人と文学」

北宋の都汴京のさまを描いた『東京夢華録』、南宋の臨安を描いた『夢梁録』ほかの都市繁昌記には、当時の商店の記録が多く残されている。宋代の首都は政治の中心であるとともに商業の中心でもあった。そして、そうした都市の盛り場で行われた語り物(説話)がもたくなって、白話小説が成立する。当時の語り物には、大きくわけて「講史(時代物)」と「小説(世話物)」があったが、この後者には、商人を主人公とした話も少なくない。

明末馮夢龍の「三言」になると、商人の活躍はより顕著になり、例えば『古今小説』巻一「蔣興哥重会珍珠衫(蔣興哥が重ねて珍珠衫に会うこと)」では、広東系商人と徽州商人の具体的な活動の様子を見てとることができる。商人はまた作中人物ばかりでなく、小説などの読者としても重要であり、さらに大商人になると、著名な文人に伝を書いてももらったりするものもあった。商人をめぐる文学は、中国文学の一つの底流をなしているといえるだろう。

松浦史明「15・16世紀カンボジア史における「断絶」と対東アジア交易」

本発表では、アンコール朝解体前後のカンボジアに関する各種の史料を整理することを通して、日本・東アジアの交流関係に前近代カンボジア史の立場から光を当てることを目的とする。

東南アジア大陸部において強勢を誇ったアンコール朝は15世紀頃に解体し、王権の中心はカンボジア南部地域へと移った。この時期の経緯については、「史料上の暗黒時代」とも呼ばれる現地同時代史料の不足から、明らかでない部分が多く、種々の面で歴史の断絶がみられる。しかし、漢籍をはじめとした他地域の史料には、現地における史資料の激減(あるいは19世紀頃に編纂された『王朝年代記』をもとにした近世カンボジア衰退史観)と相反するかのよう、「真臘・柬埔寨(カンボジア)」の旺盛な対外交易が記されている。

他方で、残存する史料状況からは王権による対外交易への直接的な関与は少なくとも16世紀頃までは低調であったと考えざるを得ず、このことが文献上のカンボジア観が12世紀

末の見聞録『真臘風土記』など前代の記述に頼られ続けた一因ともなつたと考えられる。

位田絵美「『増補華夷通商考』から見える東アジアの物産品」

元禄8（1695）年刊『華夷通商考』と宝永5（1708）年刊『増補華夷通商考』は、ともに長崎出身の西川如見の著作である。如見は改訂理由を「誤りを正すため」と述べるが、従来の研究では、『職方外紀』による西欧情報の増補が中心であると言われてきた。しかし筆者は、『職方外紀』以外からの情報に着目し、どのような情報が増補されたのか、分析を行った。結果、改訂には大きく3つの傾向があることが判明した。1 絵図の増補、2 「土産」の項目の充実、3 歴史・伝承記事の増補である。

今回はこのうち、2 「土産」の項目に着目し、『職方外紀』にはない東アジアの物産品情報が、どのように増補されているのかを具体的に検証する。この分析によって、宝永5年当時、東アジアの物産品情報が、どの程度日本に流入していたのかを明らかにすることができる。実際にはその品を手にとることのできなかつた人々も、朱印船貿易時代に祖先が行き来した異国の地の物産品をイメージし、思いを馳せることができる情報が『増補華夷通商考』には記載されている。

評者：中島楽章、樋口大祐、小林ふみ子

VII ラウンドテーブル 11月6日（日）16：35～17：55

本セッションでは、I～VIの討議をふまえて、かつ個的な課題をも交えて総括的な問題提起にもとづく議論を展開する。

発表者：荒木浩、横山学、ツベタナ・クリステヴァ、李成市、ハルオ・シラネ